

## 第4章 陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区の調査

### 第1節 位置と環境 (第196図)

遺跡は、米子市陰田町字久幸山および曲り久コウに所在し、マノカンヤマと通称する丘陵（標高72.8m）の北麓に位置する。現況の地目は、雑木による山林と果樹園である。遺跡の眼前には溜め池の久幸池があり、遺跡の臨む谷筋は、豊富な水量を下流に供給している。北方の谷口部には、縄文時代前期末から中期の散布地である陰田第7遺跡が存在する。谷を挟んだ東方には久幸山（標高38.6m）がそびえ、この丘陵一帯に、弥生時代後期および古墳時代後期から奈良時代にかけての集落跡が検出された陰田第6遺跡が形成されている。調査区はa区からd区に区分され、a区はマノカンヤマと北方に派生する支丘陵、通称墓山（標高33.3m）によってなす小さな谷地形の斜面部と谷底部に、b区～d区は丘陵の斜面部および麓部に立地する。調査区内の標高は、現況で10～27.5m、検出面で8～26mである。

### 第2節 調査の経過と方法 (第197～199図)

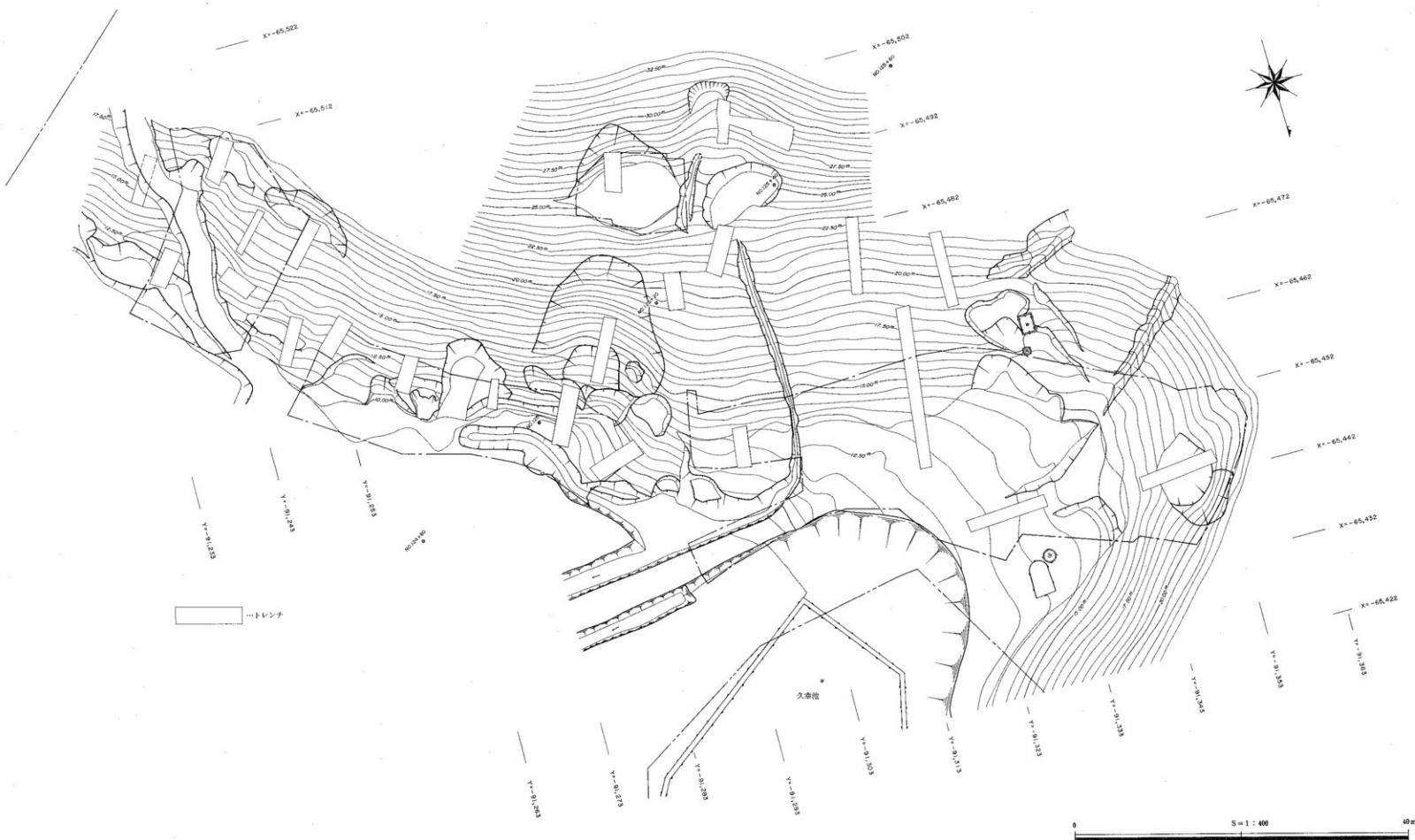
調査は、平成5年4月より準備作業に着手、以後11月まで現場作業を実施した。調査地内は、事前に米子市教育委員会によって試掘調査が行われており、遺構、遺物の検出状況と現地形の様子から判断して、調査範囲を決定した。調査区はa区からd区の4ヶ所に区分され、総調査面積は1,985m<sup>2</sup>であった。調査前の地形を平板測量し、試掘調査時の土層状況を勘案しながら重機により表土を除去後、10m画グリッドをなす測量用基準杭を南北軸にあわせて設定した。以後、土層断面観察用にベルトを残しながら掘り下げを行った。遺構の検出にあたっては、岩脈の卓越したa区の西端斜面部やc区の西側丘陵裾部では、岩盤およびそれに連なる面を検出し、土質、土色の変化する落ち込みを追求した。a区の北側平坦部では、有機質を含む黒灰褐色粘質土の遺物包含層の広がりを検出、これを除去後その下面で茶褐色系の土の落ち込みを追求した。b区では、炭化物や焼土を多量に含む灰褐色系の堆積土の広がりを検出、この層の下面を検出面とし、土質、土色の変化する落ち込みを追求した。検出された遺構については、それぞれ写真撮影、実測を行い、調査区全体については、調査後の地形を平板測量し、ラジコン・ヘリコプターによる全体空中写真撮影を行った。

### 第3節 遺構と遺物

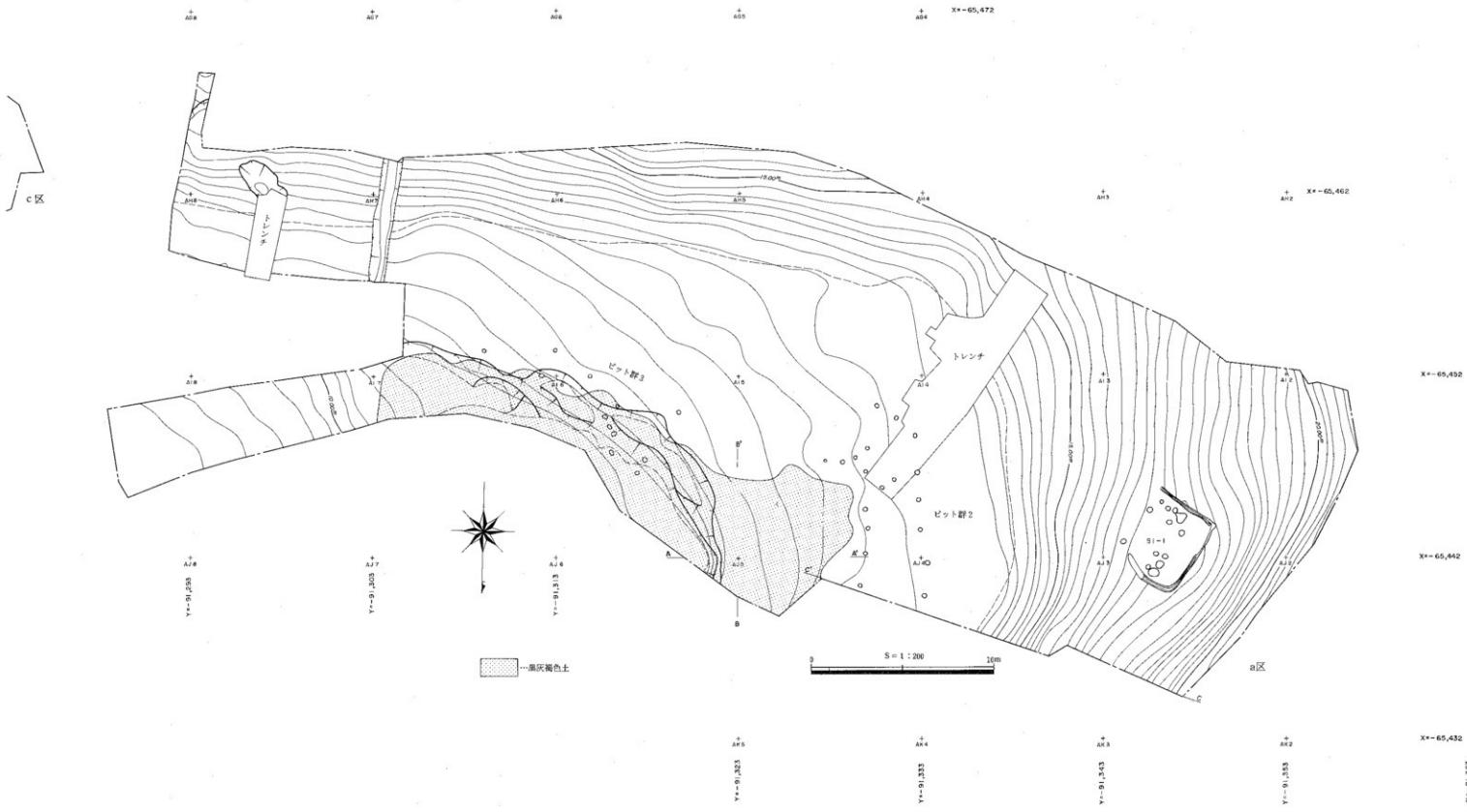
#### 1 概要 (第197～199図)

a区では、西側の谷奥斜面部で竪穴住居跡1棟（S I-1）、a区の北側の平坦部でピット群2ヶ所（ピット群2、3）を検出した。ピット群3付近では、検出面の地形が傾斜変換し、北方に向け段をなして下る。ここに遺物包含層である黒灰褐色粘質土が厚く堆積しており（第197図の網掛け部分）、弥生時代後期から奈良時代にかけての土器類が出土した。出土状況はプライマリーな状態を示さず、上方からの流入によるものと思われる。a区の谷部は、地滑りや近代以降の果樹園造園のため、原地形が大幅に改変されている。調査区外上方部の試掘調査においては、遺跡の広がりが確認されておらず、調査区周辺には、破壊や流出によって遺存していないが、本来遺構が存在していたものと推測される。この包含層中から出土した遺物についての詳細は後述するが、弥生時代後期から奈良時代にかけての土器が出土しており、a区の谷部では、本来的には断続的に遺跡が形成されたいたものと推測される。

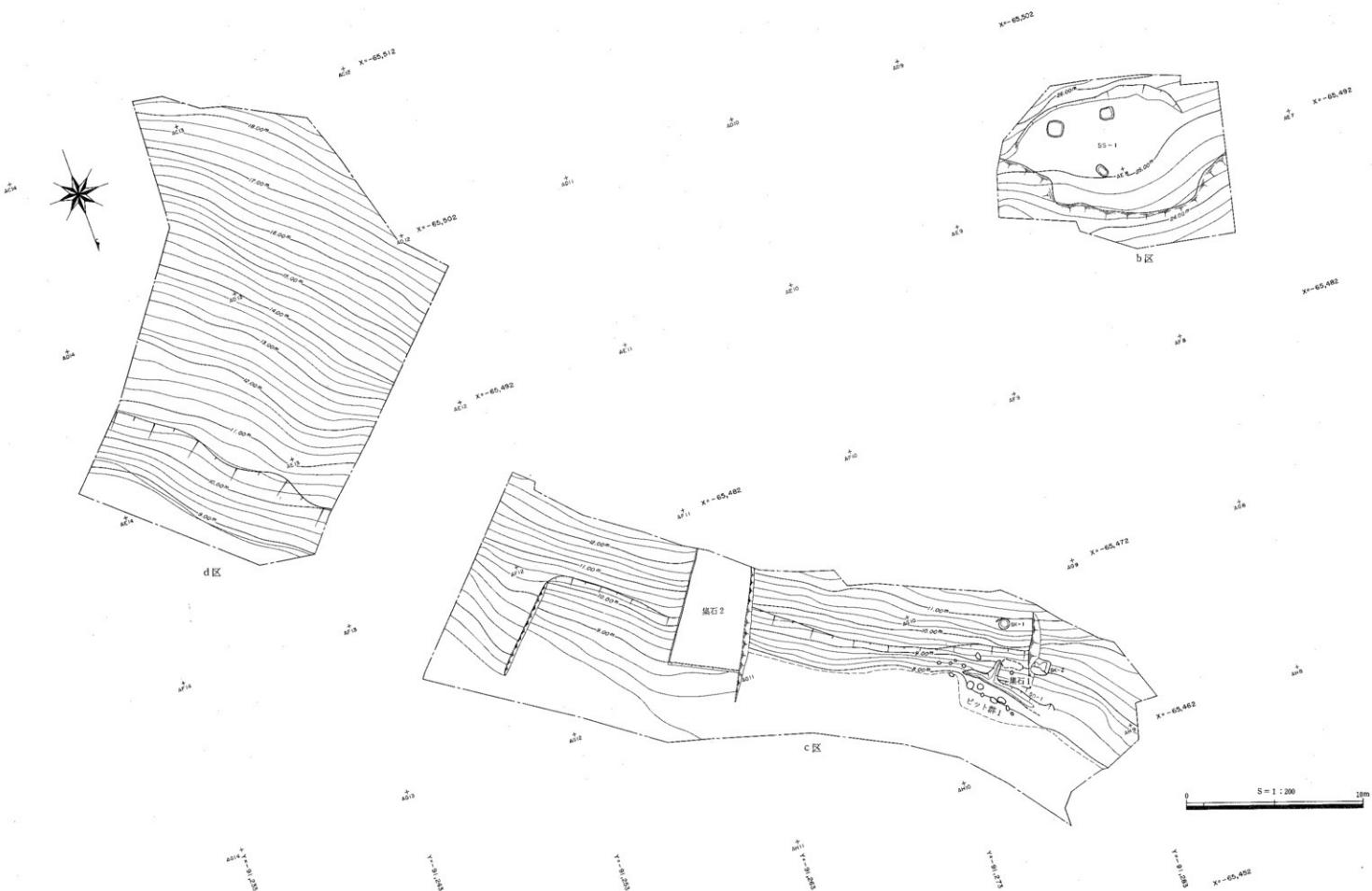
ピット群2の南西側には、大型のトレンチを変則的に掘り下げているが、この付近にみられた黑色土のシミ状の広がりを追求したものである。人為的なものではなく、自然堆積によるものであった。a区の東側にみえる溝



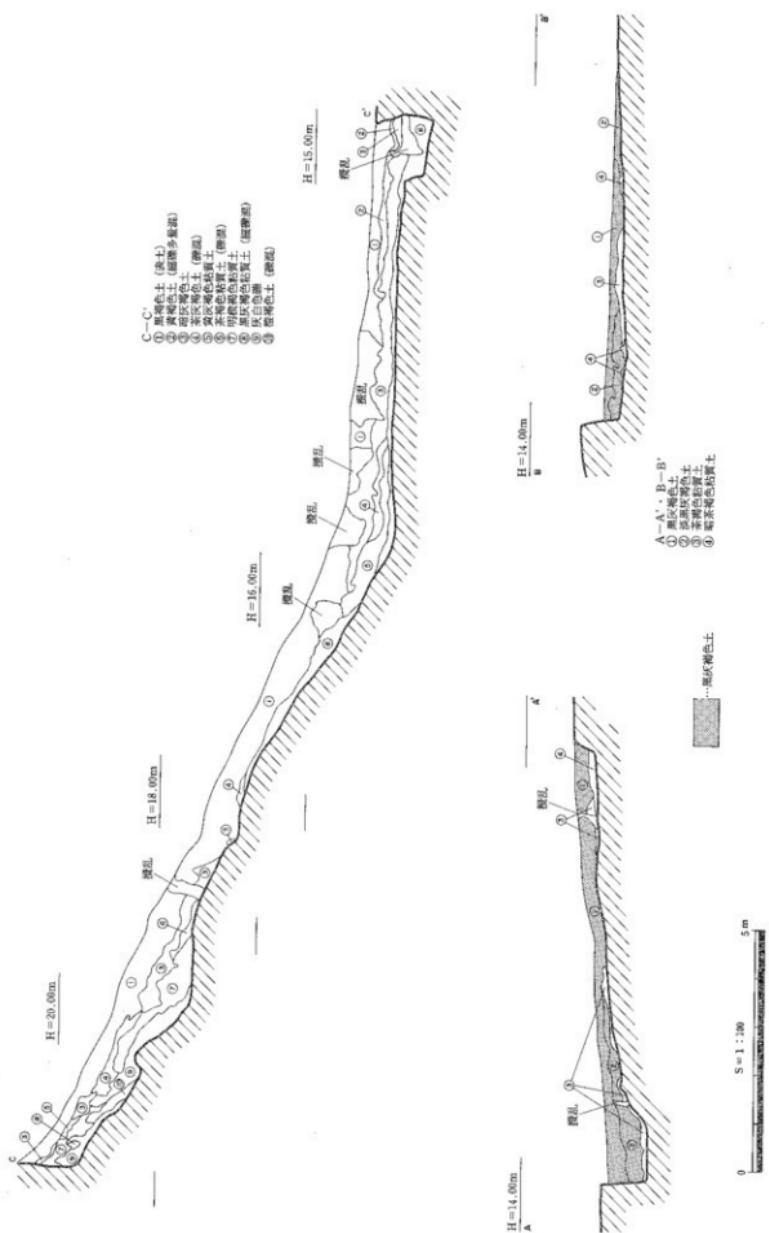
第196図 調査前地形実測図



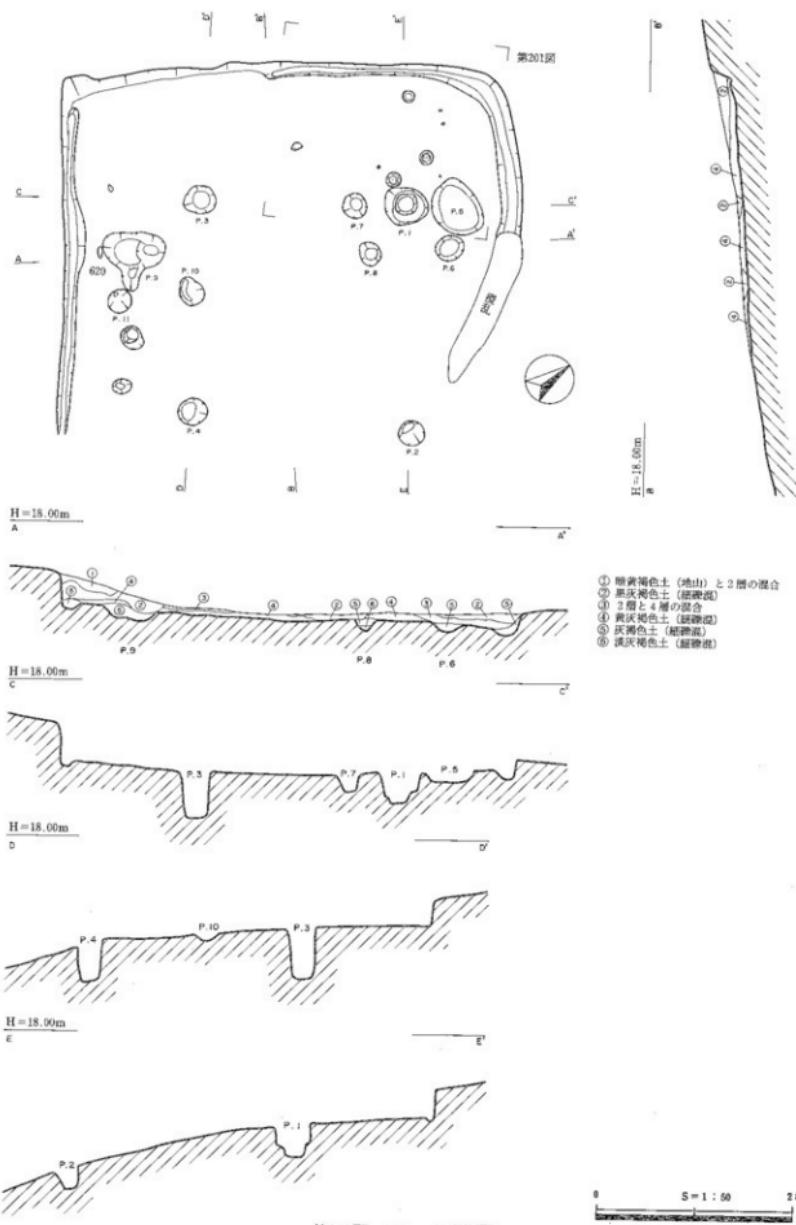
第197図 全体造構実測図(1)



第198図 全体造構実測図(2)



第199図 a 区土層断面実測図

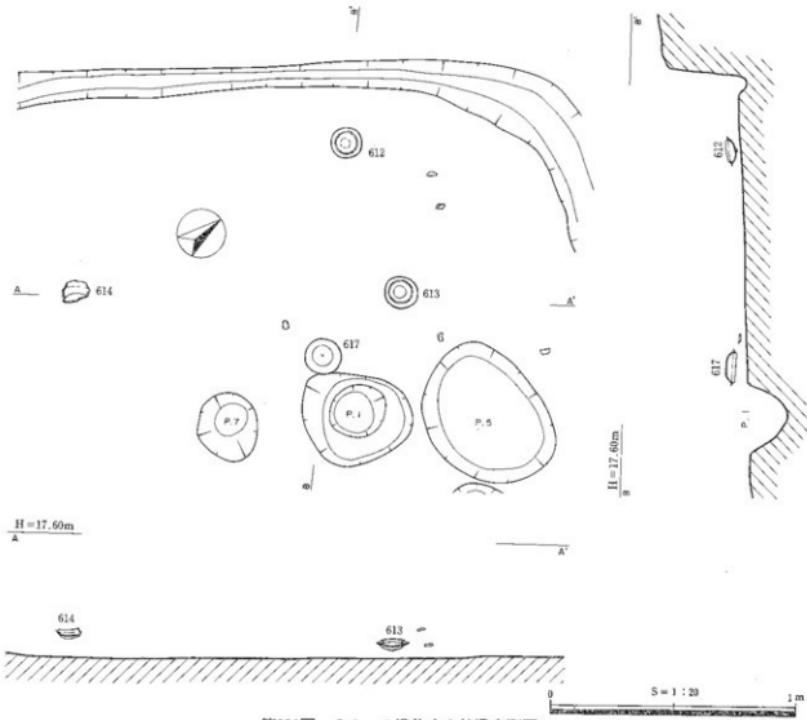


は、果樹園に伴う施設であり、さらにその東側のトレンチにかかった落ち込みは、木の根による擾乱坑である。b 区では、テラス状遺構 1 基 (S S - 1) を検出した。c 区の西側の丘陵斜面部から裾部にかけては、土坑 2 基 (S K - 1, 2)、集石 1 基 (集石 1)、溝状遺構 1 条 (S D - 1)、ピット群 1 ヶ所 (S B - 1) を、c 区の中央部では、集石 1 基 (集石 2) を検出した。d 区からは遺構を検出しなかった。

## 2 穫穴住居跡 (S I - 1) (第200~202図・写真図版41, 82)

a 区西側の谷奥斜面部に 1 基検出した。急峻な斜面をテラス状に整形して、住居を構築したものである。床面の標高は約 17m である。平面形は方形を呈するが、南東側は流出している。規模は、北西辺で 4.7m、残存壁高は南西側の壁で 40cm を測る。床には、壁に沿って溝をめぐらしており、北東部で幅 25cm、深さ 10cm を測るが、南西部で途切れている。床面では、ピット 13 基を検出した。そのうち主柱穴と考えられるものは、P. 1 から P. 4 の 4 基である。P. 1 は 2 段に掘り込んだもので、他は素掘りである。周囲の状況から、集落を構成せず、単独で建造されたものと推察される。

遺物は、須恵器、土師器が出土した。住居跡の北西部にほぼ集中しており、床面に近い位置から検出した。器形の判断できるものはいずれも須恵器で、3種 4 個の蓋と环身 2、椀 1、脚部片 1、壺片 1 である。土師器はすべて細片である。616 は、天井部を丁寧にヘラケズリしている壺蓋である。焼成の際の別個体との溶着痕が観察される。617 と 618 は内傾するたちあがりをもつ环身で、両者とも、底部を丁寧にヘラケズリしている。617 の底部内面には、赤色の物質が付着している。618 は、617 に比べて底部が円味をもち、焼成は不良で、灰白色を呈

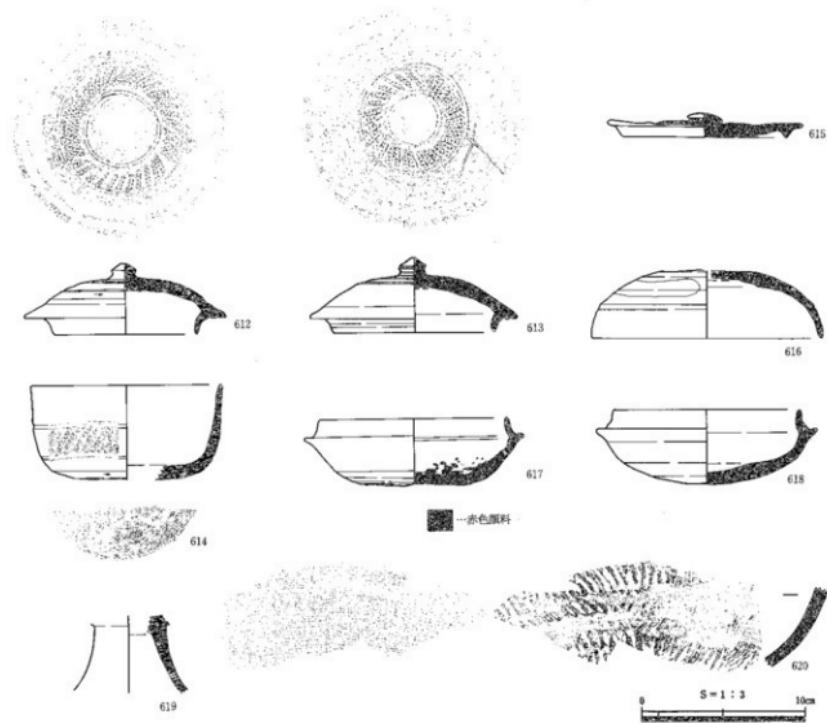


第201図 S I - 1 遺物出土状況実測図

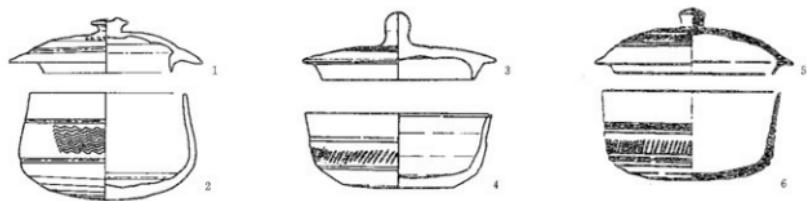
し、底部全面から口縁部にかけて広く黒班が生じている。612と613は、擬宝珠つまみをもち、内面にかえりを有する蓋で、共に上面に2本の沈線をめぐらし、その間に板状工具による列点文を施している。613には、ヘラ記号のような×状の刻印が見える。調整は、両者とも上面はヘラケズリ後回転ヨコナデし、内面は、回転ヨコナデ後仕上げナデを施している。612はケズリがやや過ぎたものらしく、断面形が段状をなしている。614は、体部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる椀である。体部には2条の沈線がめぐらされ、その間には板状工具による列点文が施されている。底部は、丁寧にヘラケズリされている。その文様構成は、612、613に通じるものであり、相互の口径からみても、612、613と614はセット関係にあると言えよう。615は、内面にかえりを有する、扁平な形態を示す蓋であり、宝珠つまみもボタン状に偏平である。上面には1条の沈線がめぐる。この蓋とセットになると思われる器種は見あたらない。619は高杯または台付椀の脚部と思われる。620は甕の胴部片で、外面にカキ目が施され、内面は波状のタタキ後ナデである。

造構の時期は、616～618の蓋坏が示す陰埴編年の4式（註1）に相当すると思われ、6世紀後葉の実年代が与えられている。

さて、612～614の有蓋椀について、若干触れておきたい。蓋はつまみとかえりを持ち、椀は小型無蓋高杯の坏部を彷彿とさせる形態で、底部を丁寧にケズる。蓋、椀ともに圓線をもって文様帶を区切る。類例の希有な器種であるが、今回の調査で、陰田小犬田遺跡のSK-2から同様の蓋（第288図902・写真図版82）が出土している。若干偏平気味ながら、つまみの形態が類似する。鳥取県西伯郡会見町所在の寺内8号墳の周溝内出土遺物



第202図 S I - 1 出土遺物実測図



第203図 装飾のある有蓋椀（註2、3掲載より転載）  
1、2—寺内8号墳、3、4—川戸2号墳、5、6—平尾山古墳群

(第203図1、2)にも類例がみられる(註2)。ただし、椀は体部から口縁部にかけて内傾する器形であり、外文様に、列点文ではなく、櫛描き波状文が施されている。蓋は、つまみの宝珠の先端が押圧されている。共伴する蓋坏は、陰田編年の4式相当、6世紀後葉から6世紀末の時期が与えられている。

近県の例では、岡山県英田郡大原町所在の川戸2号墳の玄室から、6組の有蓋椀(第203図3、4)が出土している(註3)。蓋のつまみは指頭状で、上方に伸びる形状を示す。寺内8号墳例のように先端がくぼんで偏平なものも1点みられる。椀は口縁部が外反し、文様帯は沈線ではなく稜をもって区切られているものもある。蓋、椀とともにマノカンヤマ遺跡例に比べて偏平面形態である。古墳の築造時期については、7世紀前後と推定されており、追葬は7世紀前半には終了したとみられている。

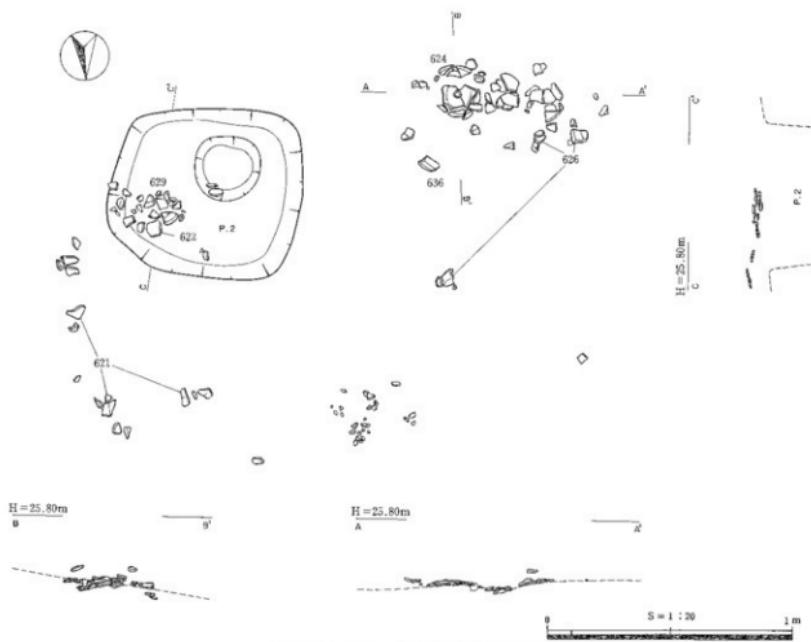
調査者の宇垣匡雅氏は、その調査報告書中で、装飾のある有蓋椀について集成し、他例と比較検討している。マノカンヤマ遺跡以外に12遺跡例が知られ、その分布は畿内から中国地方にかけて散在することを紹介している。有蓋椀を出土した遺跡のうちには、環頭大刀や金銅装馬具などを副葬し、大和政権との結び付きの密接さを窺わせる古墳が数例であること、これら古墳間に相当の離隔があり、首長間の交流によってこの有蓋椀が伝播したとは考え難く、畿内から直接各地へ伝えられたものと考察している。岡山県倉敷市所在の王墓山古墳出土例や大阪府柏原市所在の平尾山古墳群平野大塚第20支群3号墳例(第203図5、6)の、銅椀を思わせる形態との比較において、川戸2号墳例は形態の崩れが認められ、在地での模倣品であることの可能性を指摘している。ちなみにマノカンヤマ遺跡例は、蓋のつまみが擬宝珠状である点に若干差異が認められるものの、前2者に近い形態と言える。

上述したとおり、装飾のある有蓋椀の出土例相互に微妙な形態的差異が認められる。宇垣氏の指摘どおり、畿内から銅椀を模した有蓋椀が各地に直接伝わったこと、あるいは在地での模倣が行われたことによるものと思われる。蛍光X線分析の結果によれば、616、618が地元産であるとのに対し、612、614は外来品であり、陶邑産の可能性が指摘されている(註4)。

陰田地内における須恵器椀の出現は、陰田編年の4式にあたる。S I - 1の時期と重なる。陰田地内ではこの時期より横穴墓の造営が始まり、新たな葬送儀礼に用いる新たな器種として椀が加えられたものと思われる。612～614もそのような背景のもとに出現したものとも考えられる。ただし、当遺跡における装飾のある有蓋椀の出土状況に唐突な感があり、他例の出土背景に窺われる大和政権との関係を、当遺跡においてどのように捉えるべきか、課題が残る(註5)。

### 3 テラス状遺構 (SS-1) (第204～206図・写真図版42、83)

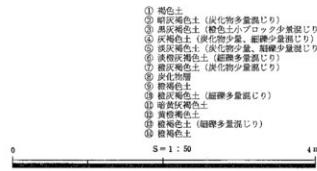
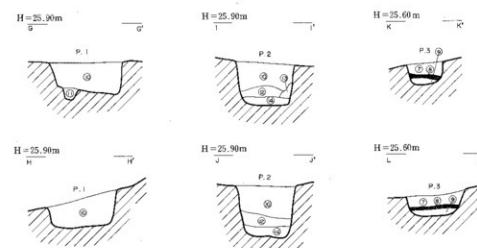
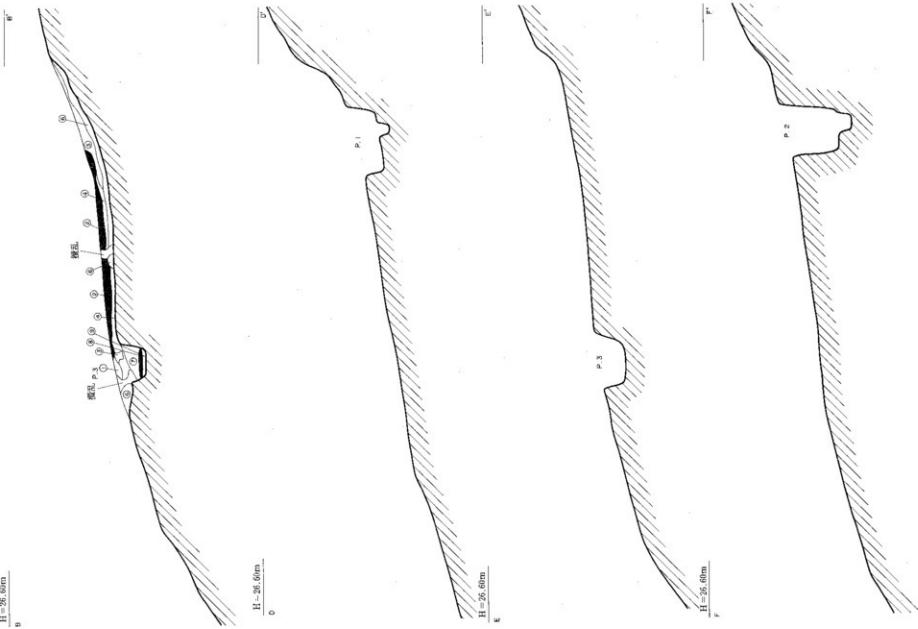
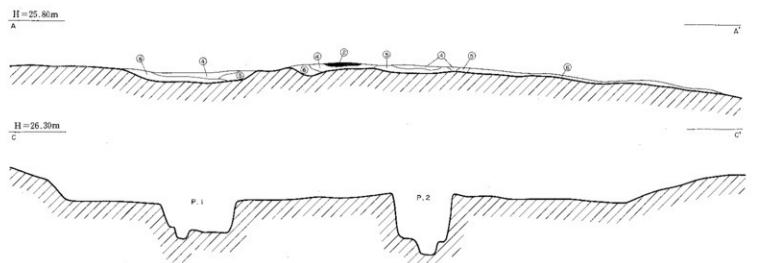
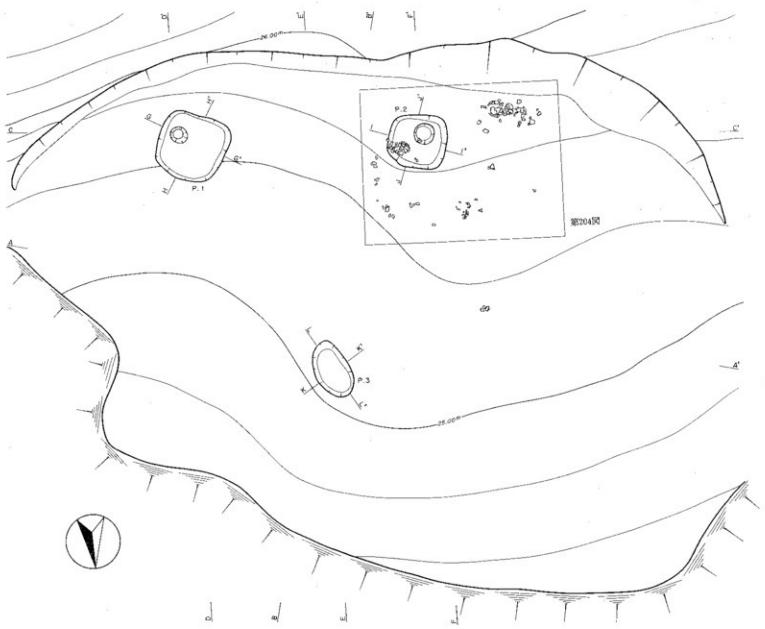
マノカンヤマ山頂から北に下る急斜面の中腹、標高約25m辺りに位置するテラス状の遺構である。調査区b区にあたる。ここからの景観は、墓山と久幸山の2つの丘陵が左右の視界を阻んでおり、正面の谷口方面に沖積地を挟んで、日御崎神社の鎮座する天竺山が望まれる。遺構は、斜面を削平して、東西9.5m、南北最大長6.5mの



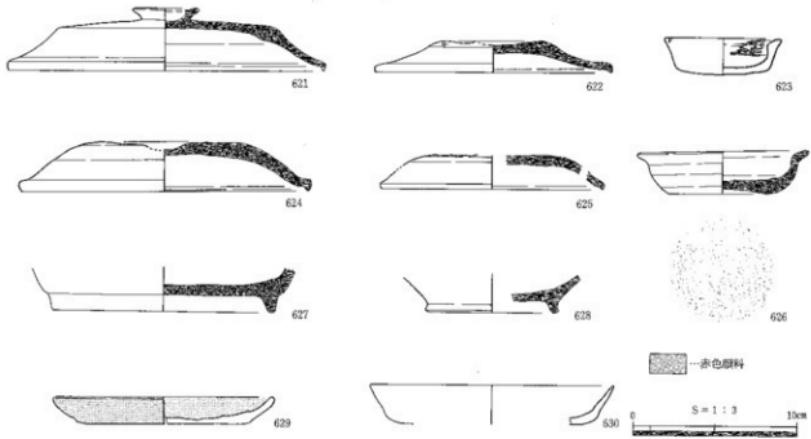
第204図 S S - 1 遺物出土状況実測図

段状地形を造成したものである。遺構の南側（山頂部寄り）で地山を70cm程度ほぼ垂直にカットしている。北側（山裾側）は一部土砂が流出しており、平面形は不明である。底面は緩やかに傾斜している。表土を除去すると、テラスの南側部分に、炭化物の細粒を多く含んだ暗灰褐色土が約4m四方に広がっているのが確認された。その下面からは、3基のピットが検出された。P. 1とP. 2は、2.1mの距離を置いてほぼ東西方向に並んでおり、柱穴と考えられる。平面が隅丸正方形を呈し、2段掘りである。テラスのほぼ中央に位置するP. 3は、梢円形を呈する。埋土は3層に分層でき、中間層は炭化物層で、その下層は炭化物を多量に含んだ焼土である。遺構の性格としては、床面から出土した土器に二次的の焼成の痕跡が認められないことより、焼出家屋の痕跡ではなく、火焚き場としての機能を考える。狼煙場または祭祀跡といった具体相を示す根拠は認められない。

遺物は、628以外の土器がP. 2周辺に集中し、ほぼ床面直上で出土した。確認できた器種は、須恵器が、蓋4、皿1、環1、土師器が皿2、環1である。628はS S - 1下方斜面に設定したトレンチから出土したものである。621、622、624、625は蓋である。621は口径19.2cmの大型のもので、口径に対して器高の低い形態を有する。天井部は平坦で、小さな径の環状つまみをもち、天井部から内湾気味に開きながら口縁部に向かう。端部は内面をややつまみ出している。全体にかなりシャープなつくりである。つまみ部分を欠損しているが、622もほぼ同様の形態を示す。624と625は、天井部から口縁部にかけてのカーブが、上記の2点よりも緩やかで膨らみを持つものである。624はつまみの欠損を観察できるが、625のつまみの有無については、確認できない。622と624のつまみは、その欠損状況から推して、握宝珠状か621のような小径のものがつくと思われる。626は環で、口縁部近くで大きく外に開く形態をもち、底部には粗い回転糸切り痕が観察される。628は、高台付きの环であり、627は、高台付きの皿と思われる。623は小型の环で、口縁部が肥厚し、若干外反する。口縁部内面に漆様の付着物が観察される。土師器のほとんどが細片あり、器形の復元が困難であったが、629、630の皿を確認した。

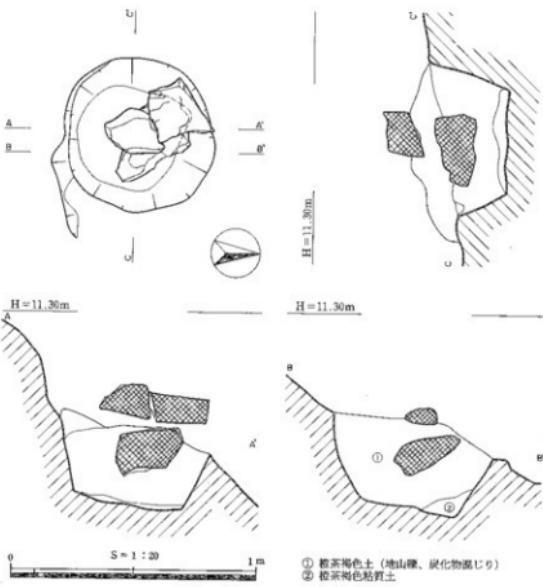


第205図 SS-1 実測図



第206図 S S-1出土遺物実測図

628以外の土器については、出土状況が一括的である。島根県安来市所在の高広遺跡（註6）における須恵器編年に従えば、621のように天井部が凹面をなして口縁部にいたる形態の蓋や、擬宝珠つまみが付く蓋はIVB期に該当する。また、环底部の回転糸切り手法の導入はこの段階から確認されている。ただし624は、つまみ以外の器形がIII B期的であり、古い形態を残すものと言える。また帰属が不明確ながらも628も III B期相当と思われる。実年代は、III B期が7世紀末～8世紀前葉、IVB期が8世紀末～9世紀前半代があてられている。出雲国宇陀の須恵器編年（註7）では、621タイプの蓋が5式に相当し、9世紀初頭に位置付けられている。奈良期の典型的な完形の环が伴わないので、これらの土器の時期的位置付けをより困難にしていると言えるが、S S-1が営まれた時期については、8世紀後半を前後する時期と位置付けておきたい。

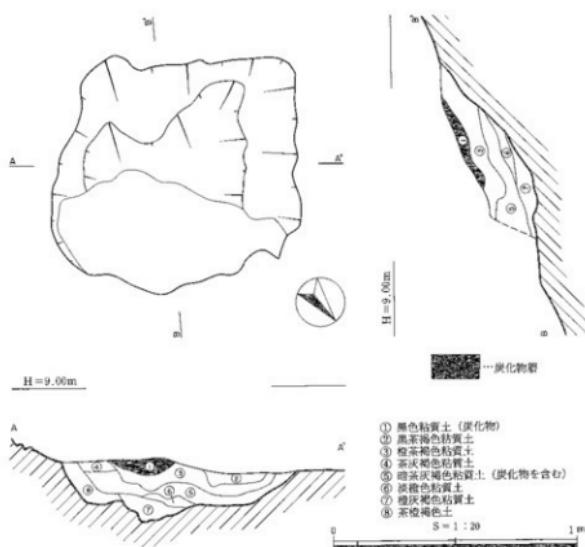


第207図 S K-1 実測図

#### 4 土坑 (SK-1、2) (第207、208図・写真図版43、44)

土坑は、c区の西側の丘陵斜面部から裾部にかけて2基 (SK-1、2) 検出した。SK-1 (第207図・写真図版43) は、斜面部の棚状の微地形上に立地する。検出面の標高は、約11mである。土坑上で、20~30cm大の角礫を3個検出した。これらの礫は、面をほぼ水平に揃えて接しており、人為的に置かれたものとの印象を受けた。土坑は、地山の岩盤を掘削したもので、平面円形を呈し、検出面で径約60cm、深さ約30cmを測る。遺物は、出土しなかった。

SK-2 (第208図・写真図版44) は、丘陵麓部の



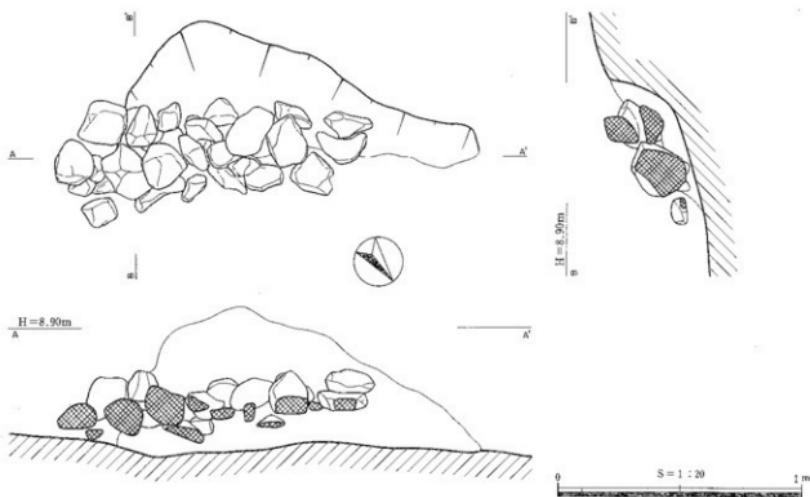
斜面と平地の地形変換点付近に立地する。検出面の標高は、約9mである。地山の岩盤を1辺約95cmの隅丸正方形気味に掘削して、小さな段状に加工している。段の高さは、約40cmである。検出面で黒色粘質の炭化物の塊を確認し、その下層は焼土層であった。焼却跡と考えられる。遺物は、出土しなかった。

#### 5 集石遺構 (集石1、2) (第209~216図・写真図版44、45、83)

集石は、c区で2基検出した。集石1 (第209図・写真図版44) は、丘陵麓部の斜面と平地の地形変換点付近に立地する。標高約9mを測る。後背の斜面が垂直気味に立ち上がり、地盤が平坦になるよう周囲の岩盤を掘削した場所に形成されている。加工されたのは、長さ約142cm、幅約54cm、高低差約24cmの範囲である。人頭大の自然礫が、長さ130cm、幅55cmの範囲に27個集中しているが、礫の下面のレベルを揃えるなどの規格性は見受けられなかった。集石は、地山加工面から浮いた状態で検出されているが、上方からの転石の集合ではなく、人為的に集め置かれているような状況であった。地山加工は、集石1に関係するものではなく、ピット群1に伴う所作と推察される。集石中から、土師質土器の小破片が出土した。

集石2 (第210~211図・写真図版45) は、表土中で宝鏡印塔の基礎 (G 4) と塔身 (G 1)、五輪塔の地輪 (G 5) を確認していた。これらは原位置を保っておらず、表土層下の淡茶灰褐色土層中に本来帰属するものと思われる。標高は、約10.5mである。他に五輪塔の地輪1 (G 7) と水輪1 (G 2)、空輪1 (G 3) を、人頭大の自然礫5個と共に検出した。また集石の北側下方約5mの地点でも、五輪塔の地輪1 (G 6) を検出した。集石の下部には、人為的な掘り込み等は確認できなかった。これより上方は急斜面であり、墓地を形成したような地形は認められなかったことから、これらの石塔は他所から移された可能性が考えられる。

G 4 は宝鏡印塔の基礎で、平面は35cm×35cmの正方形で、高さ28cmを測る。上面は高さ2cmの段をなし、28cm×28cmの平坦面になる。側面は、4面中3面に4弁の蓮華座をあしらった格狭間を施す。底面を、組み合わせ用に抉り込んでいる。G 1 は宝鏡印塔の塔身と考えられるもので、24cm×24cm、高さ20.5cmを測る。上面と側面



第209図 集石1実測図

4面に梵字が刻されており、金剛界五仏を表している。G 5は $28\text{cm} \times 28\text{cm}$ 、高さ $17.4\text{cm}$ 、G 6は $26\text{cm} \times 24\text{cm}$ 、高さ $11\text{cm}$ 、G 7は $29\text{cm} \times 29\text{cm}$ 、高さ $14.4\text{cm}$ の直方体の石材で、五輪塔の地輪と考えられるものである。G 2は $26\text{cm} \times 24\text{cm}$ 、高さ $15\text{cm}$ で上面と下面に平坦面を設ける。平面形は円形、断面形は梢円形を呈しており、その形態から五輪塔の水輪と考えられる。G 3は、 $16\text{cm} \times 14\text{cm}$ 、高さ $10\text{cm}$ で平面円形、断面梢円形の石材で、五輪塔の空輪にあたるとと思われる。

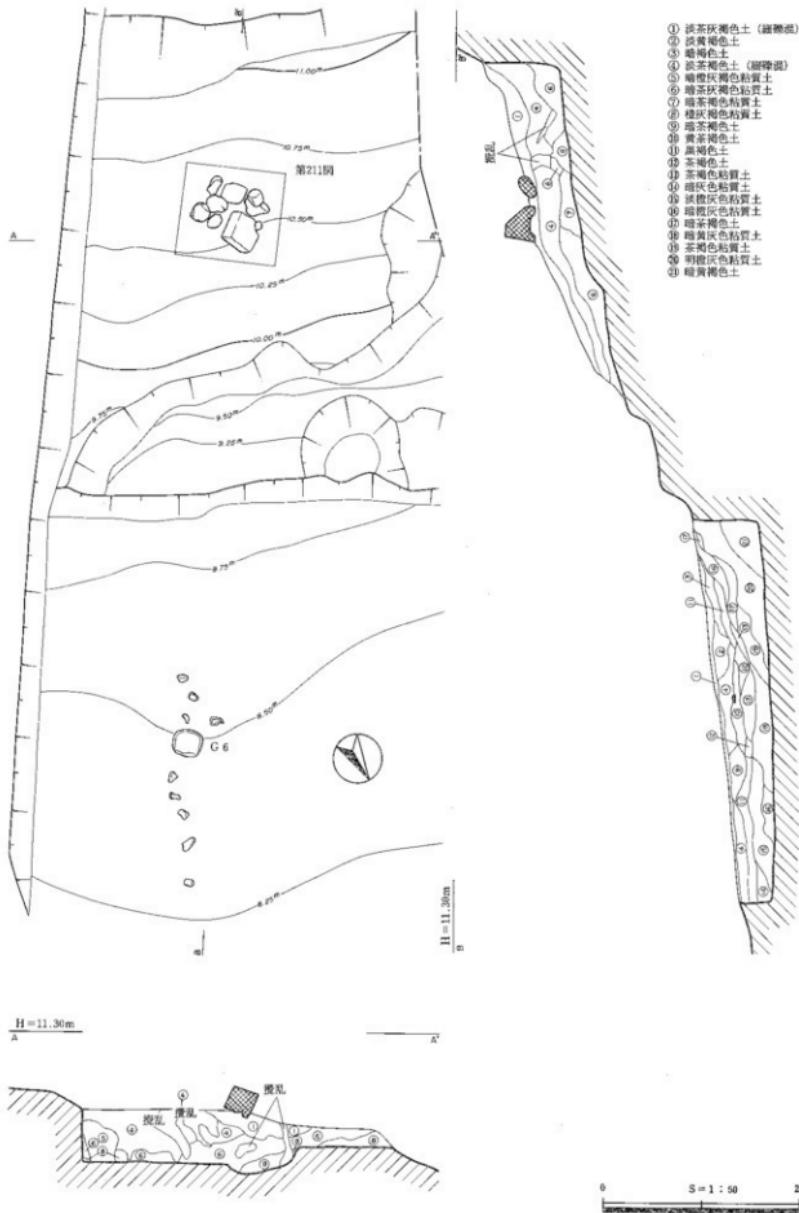
このほか集石2の周辺から、631～635の遺物が出土した。これらは原位置を保っていないものと思われる。631は、土師質土器の小皿で、煤の付着がみられ、灯明皿と思われる。632は、土師質土器の壺の底部で、糸切り痕が観察される。633は、備前焼の擂鉢で、6条の節目が観察される。634は瓦質の平瓦である。635は銅錢で、「熙寧元寶」(北宋・初鋤1068年)と確認できる。原位置を保っていないものの、これらの遺物の出土から、集石2の石塔類は、ほど近い場所に本来位置していたものと考えられる。

## 6 溝状遺構 (SD-1) (第217図)

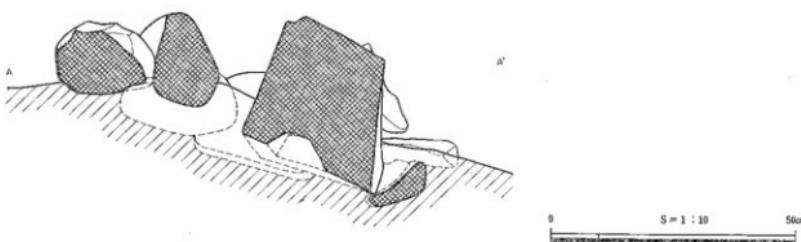
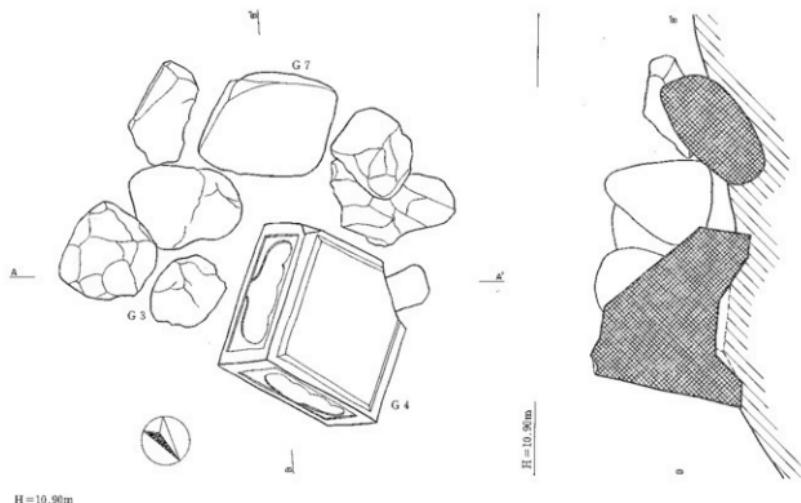
SD-1は、c区の西側、集石1の北東側に隣接する。標高は、約 $8.5\text{m}$ である。平面はT字形、断面はU字形を呈する。SD-1は、ピット群1に関連する遺構と思われ、集石1で述べた地山加工面に設けられている。遺物は出土していない。

## 7 ピット群 (ピット群1～3) (第217、218図・写真図版43)

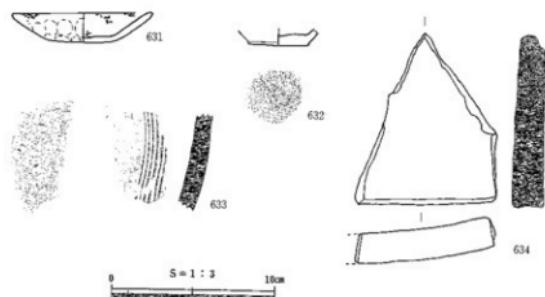
ピット群1 (第217図)は、c区の西側に位置し、標高は約 $8\text{m}$ である。ピットの数は14基で、SD-1を伴うものと思われる。配列に規則性を見出せなかった。遺物は出土していない。ピット群2 (第218図・写真図版43)は、a区の西側、S I-1の下方に位置し、標高 $13\text{m}$ 前後の地点の平坦面に立地する。19基のピットで構成され、横列状の並びを示す。遺物は出土していない。ピット群3 (第218図・写真図版43)は、a区北側の段状の落ち込み部周辺に位置し、標高 $11\sim 12\text{m}$ 地点にあたる。12基のピットで構成され、配列に規則性を見出せなかった。遺物は出土していない。ピット群2、3は、埋土の観察から、果樹園に伴う施設である可能性も捨てきれない。



第210図 築石2実測図(1)



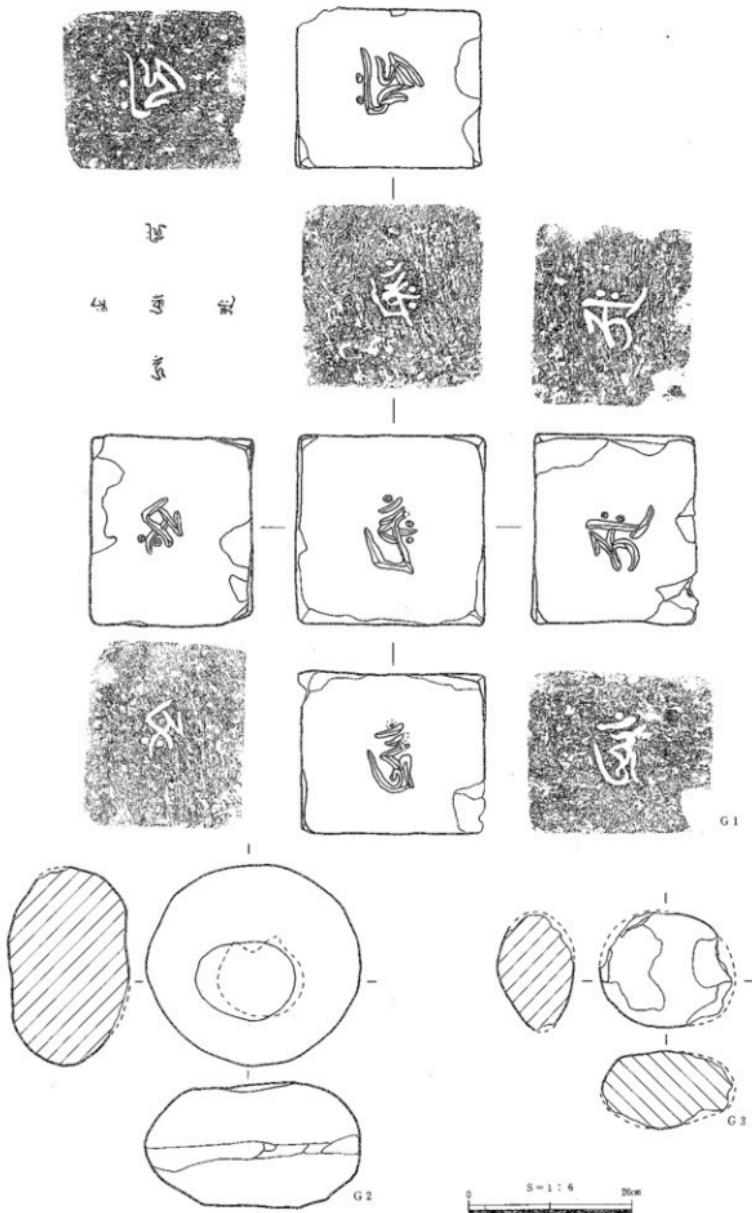
第211図 集石2実測図(2)



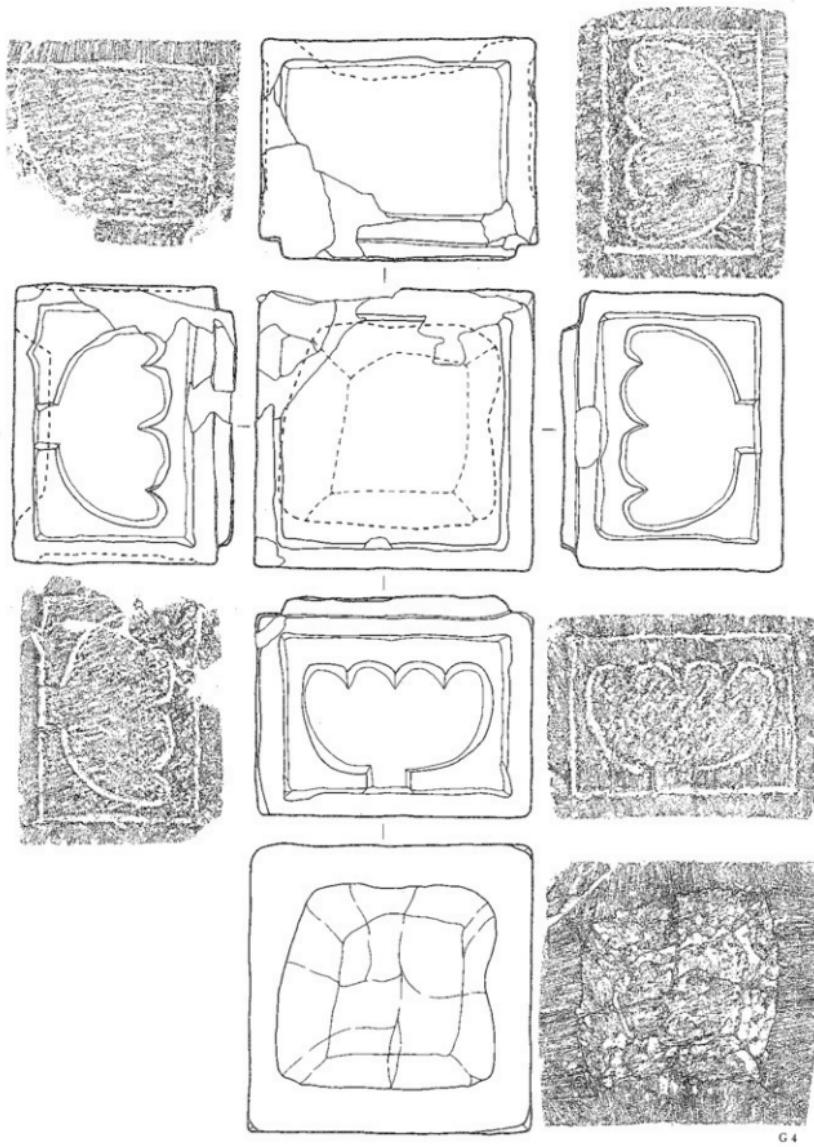
第212図 集石2出土遺物実測図(1)



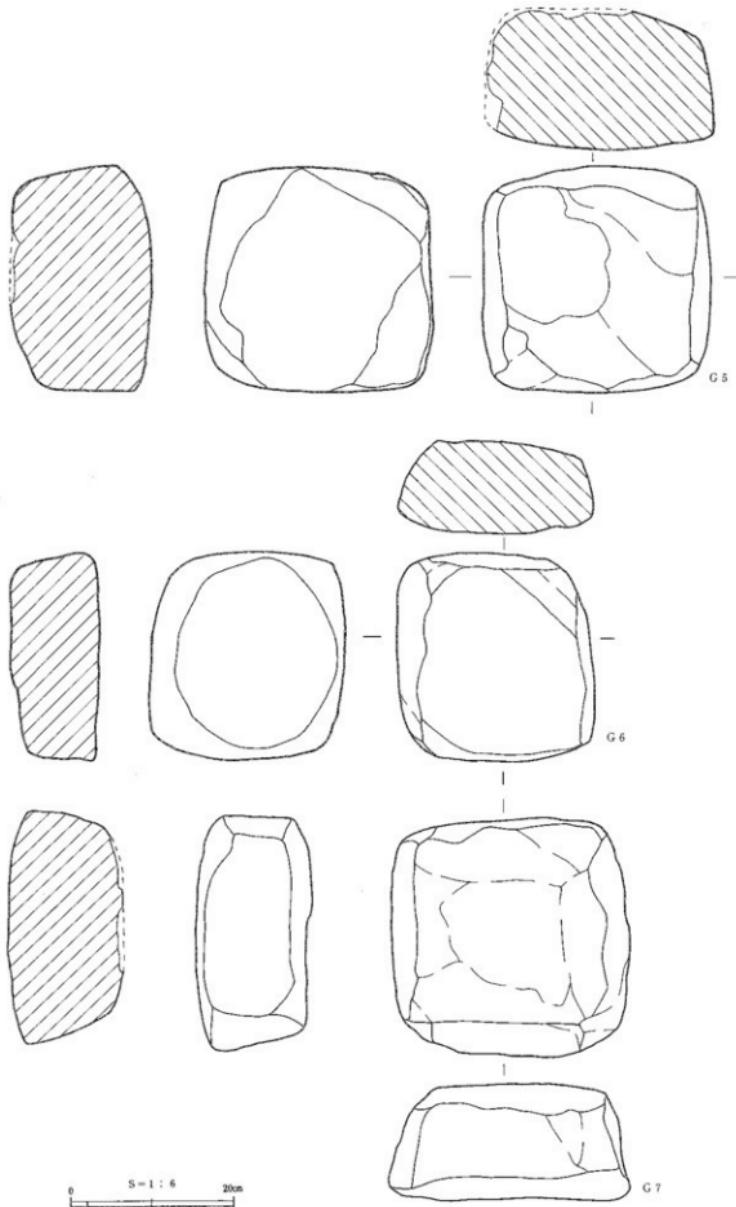
第213図 集石2出土遺物  
実測図(2)



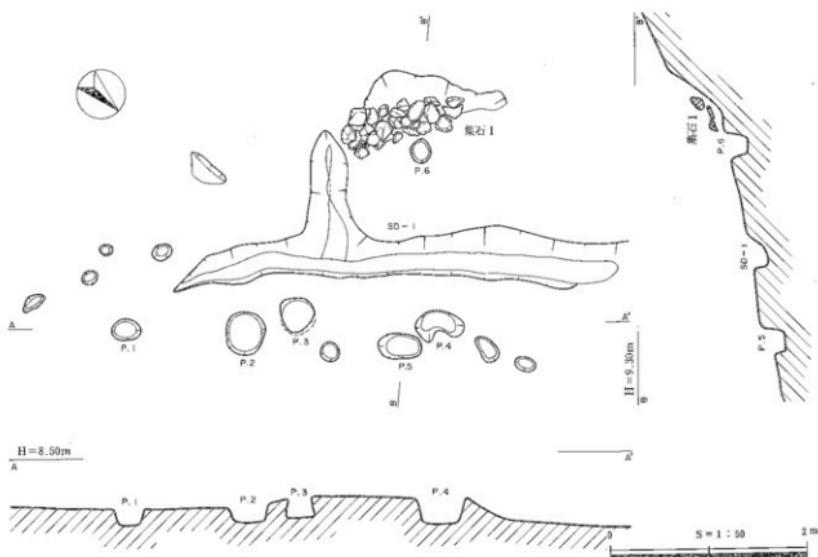
第214図 集石2出土石塔類実測図(1)



第215図 集石 2 出土石塔頸実測図(2)



第216図 集石2出土石塔類実測図(3)



第217図 SD-1、ピット群1実測図

8 遺構に伴わない遺物 (第219~225図・写真図版83、84)・弥生土器 (636~641) (第219図)  
626~639は、甕の口縁部で、636に平行沈線が観察される。639の口縁部外面には、ハケメが観察される。弥生時代後期終末に相当する。640は、器台型土器の脚部で、641は、上げ底気味の平底の底部である。弥生時代後期に相当すると思われる。

・土師器、土製品 (642~668) (第219、220図・写真図版84)

645~647は壺である。645は古墳時代前期に相当する。642~644、648~651は甕、652~664は高環で、古墳時代中期~後期に相当する。665は壺、666、667は手捏ね土器、668は支脚の円筒状の脚部である。

・須恵器 (669~691) (第221図・写真図版83、84)

670は6世紀後葉、669、671、672は6世紀末~7世紀初頭の蓋環である。675~683は奈良時代の蓋、壺で、底部に糸切り痕が観察される。673、674、684は高環で、673は有蓋高環の蓋である。685、686は甕の口縁部、687~689は壺である。690は小片ながら円面覗と判断した。691は壺甕類の把手であろう。

・陶磁器 (692~697) (第222図)

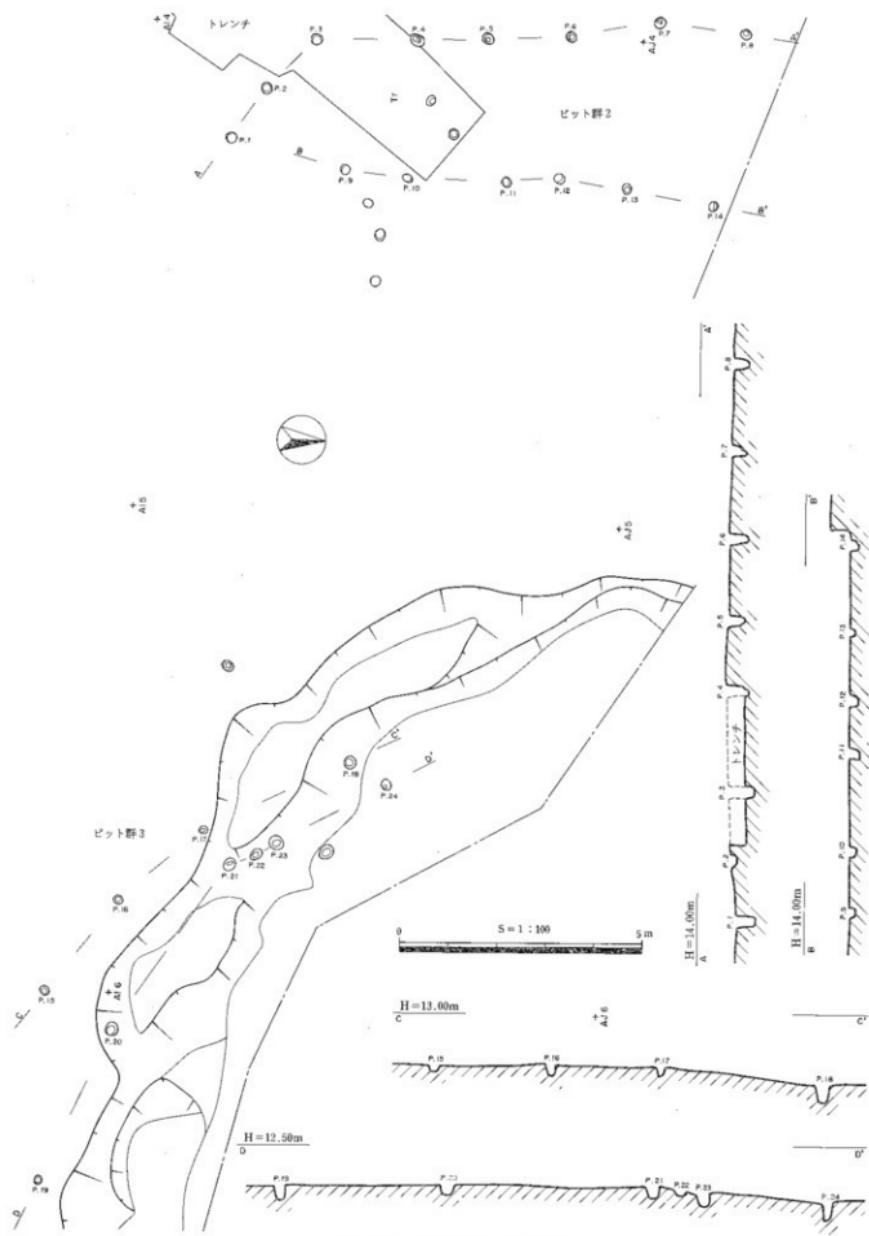
692は備前焼の擂鉢で、注口部を含む個体である。問壁編年のIVB期、15世紀後半~16世紀初頭に相当する。693と696は国産青磁で、696は表面がかせている。694は瀬戸美濃の天目碗で、大窯IIIに相当する。697は18世紀前半の伊万里の染付磁器の皿で、695は产地不明の陶器だが、18世紀代のものと思われる。

・石製品 (698~701) (第223、224図)

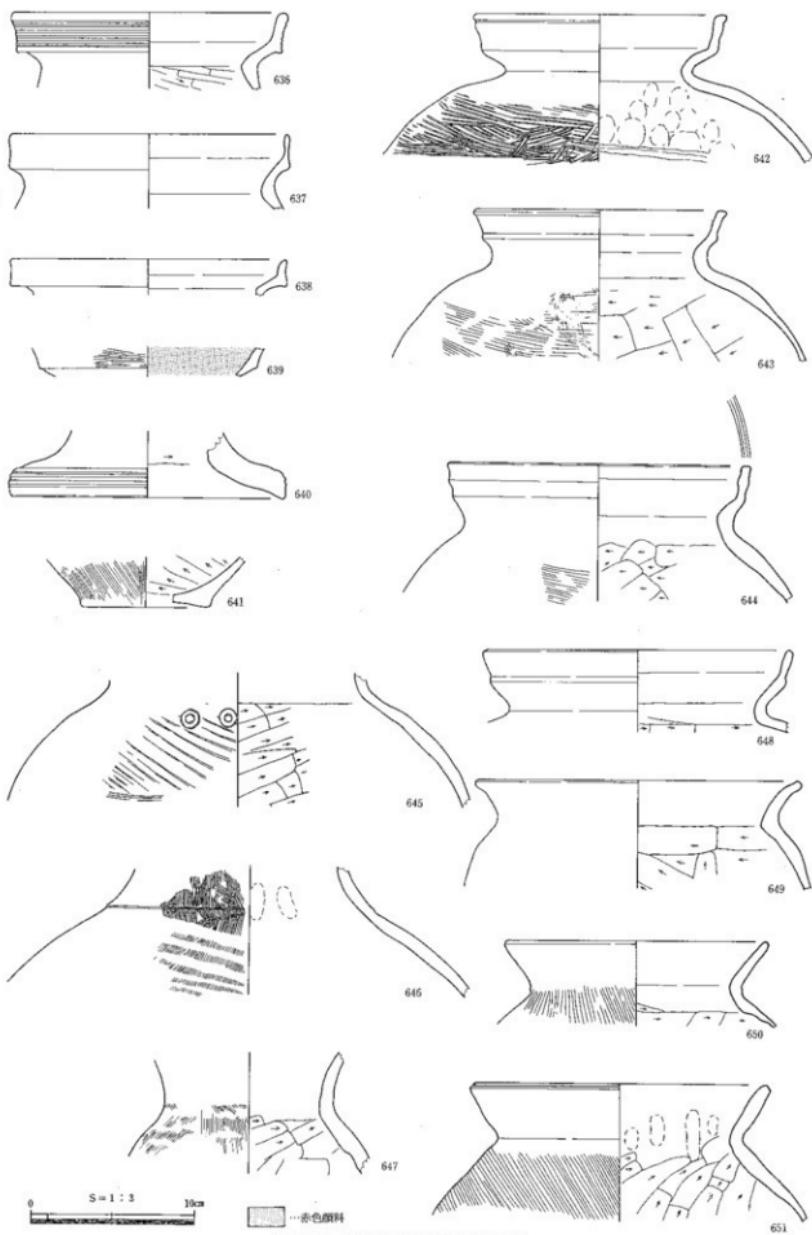
698は黒曜石製の楔形石器、699、700は黒曜石製の石鎌である。701は花崗岩製の台石で、赤色の物質が付着している(註8)。

・鉄製品 (702) (第225図)

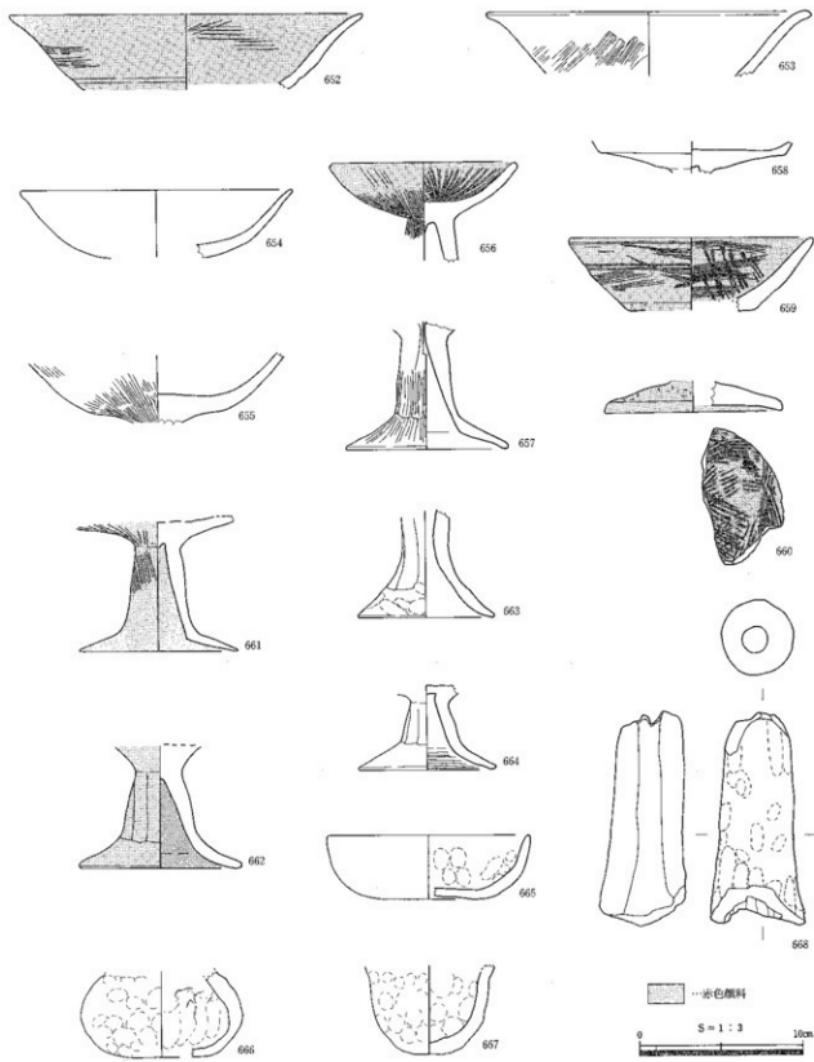
702は鉄鎌と思われる。



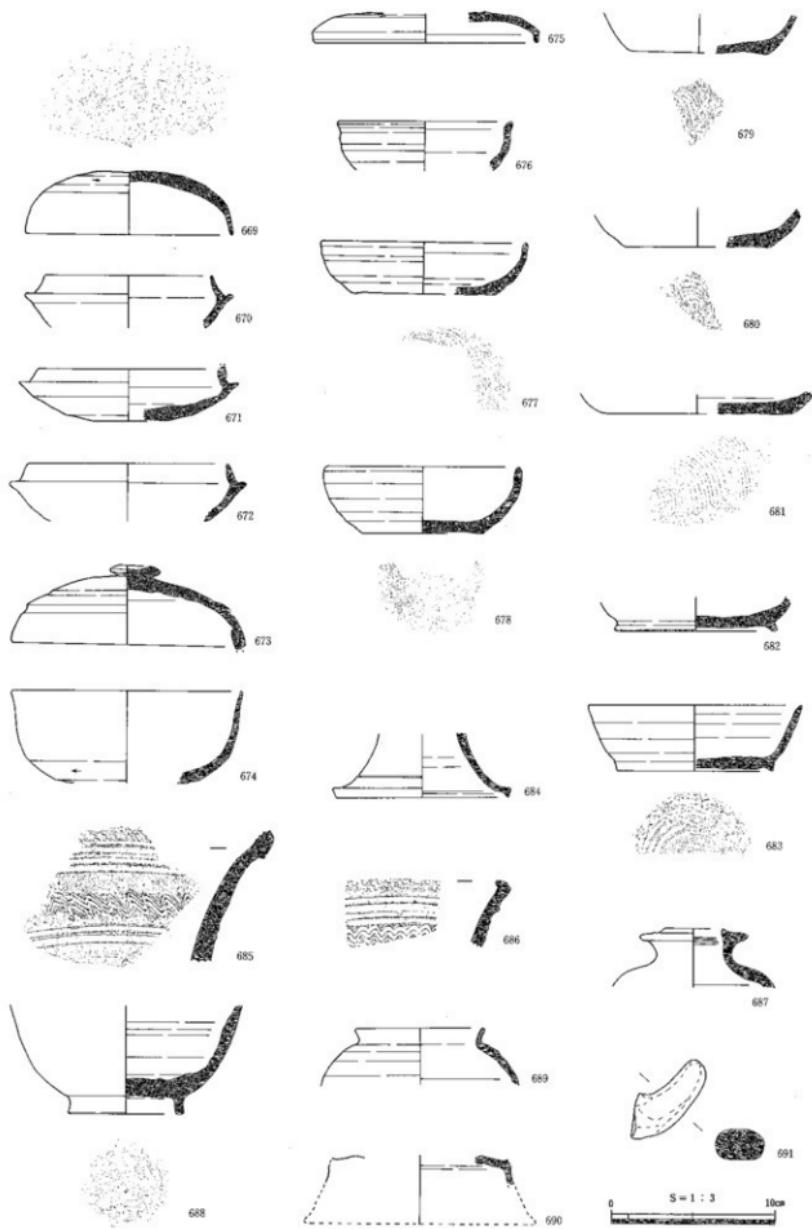
第218図 ピット群2、3実測図



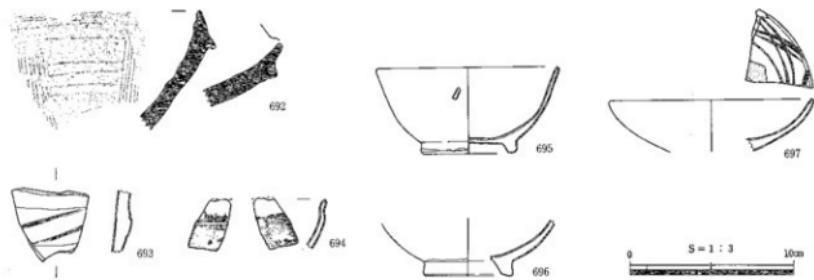
第219圖 遺構外出土遺物実測図(1)



第220図 造境外出土遺物実測図(2)



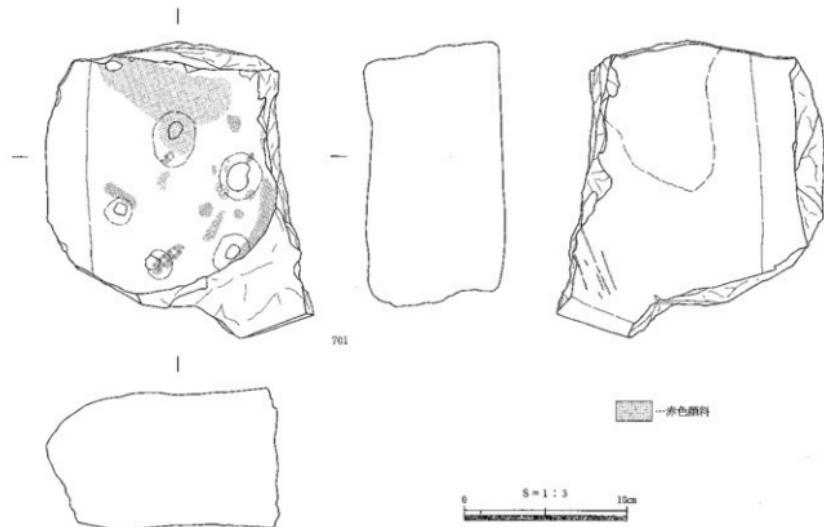
第221圖 造橋外出土遺物實測圖(3)



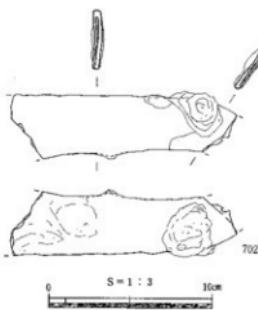
第222図 遺構外出土遺物実測図(4)



第223図 遺構外出土遺物実測図(5)



第224図 遺構外出土遺物実測図(6)



第225図 遺構外出土遺物実測図(7)

- 註1 萩本勝・佐古和枝 「第4節；須恵器について」 『陰田』 米子市教育委員会 1984年
- 註2 「寺内八号墳発掘調査報告書」 会見町教育委員会
- 註3 宇垣匡雅 「川戸古墳群発掘調査報告書」 大原町教育委員会
- 註4 三辻利一 「陰田遺跡群出土須恵器の蛍光X線分析」 (本書第9章第1節)
- 註5 装飾のある有蓋碗については、岡山理科大学理学部亀田修一先生にご教示いただいた。
- 註6 「高広遺跡発掘調査報告書」 島根県教育委員会 1984年
- 註7 「出雲国庁跡発掘調査概報」 松江市教育委員会 1970年
- 註8 石製品の石材については、鳥取大学教育学部赤木三郎先生にご鑑定いただいた。

鳥取県教育文化財団調査報告書47

一般国道9号米子道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X

鳥取県米子市

陰田遺跡群（本文編Ⅰ）

発行 1996年3月29日

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

〒680 鳥取市東町1丁目271番地

電話 (0857) 26-8397

印刷 中央印刷株式会社